東北の林木育種

NO.54　1975.1

謹賀新年

年頭所感

東北林木育種場長　波多野　文雄

あけましておめでとうございます。昭和50年という区切りのよい新年を迎え、気分を新たに、仕事のスタートを切りたいものです。昨年は、全国植樹祭にあたり、天皇・皇后両陛下に育種場を親しく観察していただくという光栄に浴することができましたが、この感激を新たに、新年の仕事にとりくんで参りたいと思います。

昭和49年という年は、世の中は、物価高、不況政変、爆弾等々、何かと慌しいことばかりでしたが、漸く世情も安定のきざしを見せ始めたようですし、経済界も高度成長路線から安定成長路線へと方向転換されて参りました。しかしこれに伴って総需要抑制のなかで、厳しい事情のもとに新年度の仕事にとりくまねばならぬことは当然で、それだけに、一層の創意と工夫が必要とされるでありましょう。

このような情勢になったのも、所詮はエネルギー問題と資源枯渇に由来するものですから、世の中が高度成長から安定成長へ、高速から減速へと動いているのとは対照的に、私共資源の造成を業とする者は、一段と業務をスピードアップし、生産力の増大に寄与することが必要と考えられます。

さて昭和50年と一口に言いますが、この半世紀の間は、日本歴史がかつてない激動期であったように、林業界もまた様々の紆余曲折を経て今日を迎えているようです。昭和初頭の天然更新択伐論全盛時代から、第2次大戦後の拡大造林推進時代へ、そして育種・密植・肥培・早成樹種の導入等あらゆる手段が講じられて参りましたが、40年代になって自然保護主義の台頭、天然林施業の復活等、新しい情勢が展開されて参りました。林業は息の長い仕事であるだけに、ある一つの施策なり施業法を簡単に批判評価することが危険であることは、育種の場合と同様であります。戦後の拡大造林の時期には、戦前の択伐作業はほとんど影をひそめていたのですが、最近に至り、天然林施業、林分施業、あるいは掌状作業等、かつての恒続林思想や生態学に基礎をおいた施業方法が見直されてきたことは周知の事実です。しかし、だからと言って、人工造林が生産力増強に持つ強大な力を忘れてならないことは、かつて、明治末期から大正時代にかけて行われた特別経営による一斉人工造林が、昭和40年代になって強大な威力を発揮したことを見ても明らかであります。

今後はこれら両者の長所を採り入れた新しい森林施業により、自然保護を加味した人工造林と天然林施業等との併用を基調として資源の充実が図られるわけでありますが、何れにしましても、現在の成長量を倍加しなければ将来の自給は不可能でありますから、今後、育種事業が占める役割は益々大きくなるものと言わなければなりません。

林木育種事業が昭和32年に開始されて以来、はやくも17年を経過し、この間、選抜、次代検定をはじめとする諸々の事業が行われて参りました。凡そ大課題で短年月で成果が上がるようなものはないのですから、一旦着手した事業は、社会情勢に左右されることなく、完結を見るまで、放棄してはならぬことは言うまでもありません。

かつてビオレー父子が、2代がかりで80年の歳月を費して択伐林の構造を究明したように、私共も組織の一員として、先輩の仕事を引継ぎ、そして完全な姿で之を次代に引継ぐために、最善をつくして参りたいと思う次第です。

年頭所感

東北林木育種場奥羽支場長　山口勝保

船頭の合図でリールをオープンにすると、錘の力で道糸がするすると繰り出される。左手の親指で回転の調子を整えながら、暫くすると錘が海底につく、すかさず少し巻き上げて仕掛けが根がかりするのを防ぐ、竿を持つ手の感触、或は糸のたるみ加減で錘が海底につく（底をとる）のを知り少しづつ上げ下げしていると魚信（アタリ）がコツコツ或はグウット手に感じる。

少し竿先を上げて魚の喰いに合わせ、さらに重みかアタリを確めてリールのハンドルを急いで回す、百米前後の深さでは途中で手がだるくなるが我慢して巻き続けると、水深十米位で獲物の白い腹が光って見えるようになる。この瞬間はまさに釣人の喜びが極地に達する。

全神経を魚信の感触、穂先に集中している時は仕事も、女房も、完全に忘れている。これが釣の醍醐味であろう。

何時くるか？　どんな魚か？　大きさは？　など期待感が溢れている。

以上は昨年、渡った飛島における釣行の想い出である。

釣暦十数年、上達の遅い私であるが、最近はただ多く、大きいものを求めるのでなく、いかに上手に釣るか、楽しい釣旅行が味わえるかという趣向に変ってきた。

林木育種と釣とは較べるべきもないが、やはり始めは試行錯誤の繰り返しであった。学び、体験して進歩していった。期待のみ大きくともすべてが巧くゆくとは限らない。

釣を始めた頃は錘が底についたがどうかわからなかった、仕掛けを岩や他の釣人の糸にからませたことも数多くあった。

林木育種事業も十数年の時を経たわけであるがその中では成功も、失敗も、おり混ぜて今日に至っている。そろそろ過去をふり返り、整理して、新しいステップに進む時期でないかと思う。

昭和50年の新年を迎えるにあたり、第二段階の林木育種事業の推進を祈り、努力を続けたいと思っている次第である。

年頭所感

青森県林木育種場長　畑中定雄

あけましておめでとうございます。昭和の年号も半世紀を数え、激動の中にも迎えました新年は我々の希望を全うさせる良き年でありますよう皆様と共に心からお祈りする次第であります。

林業は、ご承知の如く、農業の中でも最も広い面積と、丘陵や起伏に富んだ厳しい自然に、様々の草木が生育していて、人類の生活に多大な貢献しているのでありますが、最近の経済の成長発展と、社会の進歩向上に伴って、森林の公的機能の増進に対する国民の要請も、又益々強くなり、林木育種の業務も林政の課題として注目を浴び、森林の生産力の増強、国土の保全に次ぎ、環境の緑化等と共に、きめ細い行政が要求されてきています。而し林木育種は、如何に科学が進歩した昨今でも、一朝一夕に成果を期待することは難しく、選抜・育種・育林・検定と1年毎に積み上げ、根気よく数10年も経なければならない現状です。

諺には、1年の利を得ようとすれば稲を植え、3年の利を得ようとすれば家畜を養い、10年の計を立てようとすれば木を植え、百年の計を立てようとすれば人を教えるにあるという。国土の緑化には、戦後国を上げての努力を払いつつも、その成果は未だに図り兼ねる事が多い。仮りに10年の計を立てて植林しても、現在の林業で経営がなり

たつのかどうか、それが20年30年先を考えると尚更である。育種についてもまさに、百年の大計が必要ではなかろうか。

林木育種の仕事も早や5分の1世紀の歴史を数えようとしている。林業家にとっては、その経過と実績に大きく期待しているものと思う。作物や家畜なら何回となく成果を発表、論評して、その良否を決定し、指導も確立されているのではなかろうか。林木育種は、未だ1回の収穫も成果もみていないのである。仲々、忍耐と努力のいる仕事であることは確かである。また、計画と成果についても、一般林家にPRされていない事も多いではなかろうか。緑を育てる苦労と長い将来にかけている希望、林木に対する愛着等、草木は自然に育つものではあるが、そういう簡単なものではないということをもっと国民に理解して貰う方法を考えなければならないと思う。

本当の林木育種事業はこれからではなかろうかいままでの道程では、派手な社会の変遷と進歩の蔭で、極めて困難な歩みを続け、又、これからも思わざる障害にぶつかることも予想されるからであります。開発的性格を持ち乍らも長年月を要し自然を相手にして、而も成果は必ず成功すると約束されていないのである。関係者の英知が未知、無限の世界に勇気を持って挑戦していかなければならない、それには育種技術者の専門化も必要かも知れない。

林木育種事業を成功させるか否かは、我々関係者の努力と協力も去ること乍ら、行政当局の深い理解と援助があってはじめて成果が期待され、効果が表れるものと確信するので林野当局の特別な配慮をお願いしたい。

造林木でも、20年といえば、苗木の可愛い盛りの下刈、除伐を終え、枝を打ち、如何に間伐をして、どんな用材に仕立てようかと誠に重大な時であり、充実した山造りには、全く気を許せない緊張のときであろう。林木育種もいまその時期であることを認識して頂きたい。世界に冠たる、日本の林木育種を進めるには、精英樹のような人材を豊富に養成して当るべきであると思う。行政も技術も実行するのは人なのである。若人なのである。

エトは卯年、兎のように一足跳びに行かない縁の下の力持という極めて地味な仕事だけに特に考えなければならないことではなかろうか。

新しい年を迎えるに当り、思い出したままに拙文を綴り、諸賢の御批判を乞うと共に、我々関係者相互の意志の疎通を図り、遠大なる林木育種事業に誇りを持って仕事をし、今年1年も有意義な年にするよう努力しようではありませんか。

年　頭　所　感

岩手県林木育種場長　和久井　光　雄

明けましておめでとうございます。昨年中は公私共にいろいろとお世話になり、第25回全国植樹祭—お手まき行事—の大行事をつつがなく、しかも大成功裡に終了することが出来ましたことをここに厚く御礼申し上げます。本年もまた相変りませずよろしくお願い申し上げます。

育種事業に直接従事するようになってから四度目の新年を迎えることになりましたが、顧みまして、育種事業の担当者らしい仕事を何一つやらず今日に至ったような感じで、誠に県民の皆様に申訳がなく、これから大いに努力して御期待に沿うようにいたしたいと年頭に誓う次第であります。最初の年は、事業の流れや日常の業務の進め方或は育種場運営の仕方等現状認識のためにのみ多くの時間を費やし、次の年になって今年こそはと思っておりましたところ、わが育種場において全国植樹祭のお手まき行事を行うということになり、それ以来昨年の5月20日まで約2年間というものは行事の準備のため将に全力投球ということに相成ったのであります。その結果は、大成功という結実を見ることが出来まして、育種場本来の使命を達成したとはいえないまでも誠に得がたい成果を挙げることが出来たのであります。

育種場設置の目的は、行政組織規則に「林木の優良種苗の生産及び配布に関する事務を処理するため林木育種場を置く」と明確に決められておりますが、育種場発足以来未だ日が浅く、精英樹系統F_1苗木の山行生産も今のところ僅かなため、造林者に行き届かず、ましてや質的な面においては次代検定の結果を待たなければものを申せないと

いうこともあって育種苗のことはおろか林木育種場自体の存在すら知られていない程行政の日蔭ものの感が強かったのです。仮に名称は知っていてもその役割については間違って理解している人もあると思います。ましてやどんな仕事をしているかその内容等においては推して知るべしです。こうした実情にあったが、昨年5月に天皇、皇后両陛下の御臨席のもとにお手まき行事を行ってからは広く県民にも知られるようになり、また育種場の使命と仕事の内容についても多くの人々によく理解して貰うことが出来まして、これが何よりであったと心から喜んでいる次第です。

昭和39年に原種苗畑と称して事業的規模で育種事業に取り組み、精英樹からのクローンにより採種穂園の造成を始めて以来10年そこそこで僅少とはいえ最近ようやく精英樹系統の第一次事業用の種苗が山行苗として生産され、実用化される時期を迎えましたが、今ここに改めて当初の頃から苦労と努力をされてこられた先輩各位と同僚並びに労務作業員の皆様に対し敬意と感謝の意を表するとともに、その成果を静かに反省し、今後とるべき措置と進むべき方向について再検討しなければならないと考えております。例えば採穂園の体質改善の問題、或は採種穂園の育成管理の手法、特に合理的な仕立方と採種の手法等の問題解決がせまられているのです。これらの問題について一つ一つ着実に実行して解決の糸口を見出したいと思うのであります。

世の中はインフレ、不況時代という暗いムードのまま新年を迎えたのですが、今後どうなることでしょう。旧臘三木首相からは三木哲学について総論講義をたんまり聴かされた感がありますが、今年こそ首相は、第2章各論に入って国民の待望する具体策を示すとともに実行に移し、それが評価されることになるのです。また育種事業もこれと同様に、総論のところは既に終って各論の段階に入っているのです。緻密な計画と着実な実行の積み重ねからくる成果がきびしく評価されることになるでしょう。

何れ育種事業は林業発展の基本をなすものであり、今後益々重要ではあるが、その成果を見るまでは長年月かかるので、兎と亀のカケッコの教訓ではないが、途中ゆっくりでも一歩一歩休まずに歩み続けなければ、と考えるものです。そして育種場は、造林という戦線拡大に対してその弾丸、資材ともいうべき優良種苗の補給を司る将に兵站部にも相応する重要な任務を担っているという自負心をもって、全力を尽くして前進に前進を続けて参る所存でありますので、よろしく御指導御鞭撻の程お願い申し上げます。

年頭にあたり

秋田県林木育種場長　柴　田　昭一郎

昭和50年の新春を迎え、謹んで新年のご祝詞を申しあげます。

昨年は異常な豪雪災に見舞われ、その復旧にご苦労されたことと思いますが、今年はどうか皆々様によい年でありますようお祈り申しあげます。

林木育種事業も精英樹の選抜から始まり、クローン養成事業、採種園・採穂園造成事業へと発展してまいりましたが、本県におきましても、育種事業基本計画にもとづき予定どおり実行され、現在は採種穂園の肥培管理とその体形の整備を重点として事業を実施しております。1年でも2年でも早く、優秀な種子と穂木を量産され、優良苗木が造林地に供給されるためには、担当者のたゆまぬ努力と、育種事業の普及啓蒙が必要であると考えられます。

次代検定林の設定事業も計画どおり進めておりますが、後期5カ年計画にマツ類の検定林を設定することになっており、従来から民間林地を対象としてきた本県としては、土地所有者の意向から用地の確保に苦慮しているところですが、国の指示どおり最小限度の面積で実行するよう検討しております。

また、昭和45年度から5カ年計画で抵抗性個体選抜事業が始められ、毎年85本づつの調査を行うことになりましたが、雪国秋田の根曲り材解消えの夢を託して進めております。

このように育種事業も次から次へと新しく開発され、ますます高度な技術が要求されるようになってきました。このためには、担当者は常に技術向上のための研鑽を続けることは勿論でありまし

ょうが、優秀な作業員を確保し、その協力を得て進めてゆかねばならないと思います。労務確保のむずかしさは本県も他と同じでありますが、とくに秋田市に隣接するため、新規労働力の調達困難、それに加えて賃金の上昇は大きな悩みであります。

冬期間は降雪と作業の関係から現在通年雇用をすることができず、作業員は12月から翌年3月まで失業保険受給者となりますが、通年就労の可能な作業体系を組立てる必要があると考えております。

森林や林業に対する要請が極めて多様化している今日、育種事業もまたその要請に対処するよう推進されねばなりません。本県では、林業試験場、林業研修所、林木育種場の3つを統合し、林業技術センターを設立すべく準備を進めており、現育種場用地がその母体となり、早ければ今春より着手の予定であります。技術センター設立が本決りとなれば現在の土地利用、労務利用上に若干の変更もあり得るので、これを機会に育種事業基本計画の改訂を考えていきたいと思います。成長のみならず材質の優秀な林木の育種、あるいは緑化用樹木の育種等育種事業の守備範囲は益々広くなりつつあると思われますので、皆様方のご指導を得てすすめて参りたいと存じます。

林木育種事業の意味もよく理解していない者が新年早々、思っているまま筆をとらせていただき汗顔の至りであります。育種事業発展のため微力ながら努めて参るつもりでおりますので、多くの皆々様から絶大なご支援をお願いし、新年のごあいさつにかえさせていただきます。

年　頭　所　感

山形県林木育種場長　榎　本　恭　平

昨年は国の内外を問わず枚挙にいとまがないように、凡ゆる面において、激動の年であったと思います。なかにも世界的傾向とはいえ、前の年に一層拍車をかけた、狂乱物価とインフレには、国民自身が、狂乱ならんばかりに、あえぎながら明けくれた年であったとおもいます。

一方森林の在り方、方向づけについて、多くの批判を受けながら、社会の要請に余儀なくいろいろなメスが施されたようであるが、森林法の改正をみたのも、その一つであるといえましょう。

しかしながら、いわゆる林業の位置づけ、ということについては、いまなお一つのムードの渦中にさまよっていると申しても過言ではないとおもいます。言うまでもなく、国有林の在り方についてもさることながら、民有林の位置づけに当っては、これら自体と、これを支えて来たもろもろの機能等の構造が著しく変化を来しており、二つの歯車がかみあわなくなっており、従来の農家林業一辺倒の林政の軌道には乗らなくなっており、これらの要因のふくそうによって、一層その発見に困難を来たしているものと思われます。

唯ここで申しあげたいことは、自然保護等という森林の公益的機能というような美名の下に、押し寄せられて、林業の基本的生産性に対する施策が軽視されていないかということであります。巷には自然保護即森林の無施業、といわんばかりの声もあるやに聞いているが、もちろん森林の公益的経済的機能の調整も当然必要であることは言をまたないが、土地生産性をあげるという、林業の基本的な在り方は、いささかも戻るものではないのであり、適正な施業のもとにこそ、最高度の林業が成立し、公益的機能もおのずから生れてくるものと思います。

なおこの林業の位置づけの容易でない時こそ、育種の成果を強く取り入れることが、最も重要な手段であると思われます。

また当場では昨年より緑化樹木、主として苗木の生産を併せてやっておりますが、地域、環境に対応できる緑化樹の育種についても、早急な課題であると思っております。

年頭の挨拶の言葉には、いろいろとありますがあけましておめでとう、というこの簡単な、しかもやさしいような言葉でありますが、お正月には、誰しもが必ず言いかわす言葉である。しかしこの言葉ほど意義深い言葉はないように思います。いわゆる年を迎えるたびごとに、この同じ言葉を何度言いかわしても、何んのおかしさも覚えないばかりか、そこに新鮮味があり、その上明る

さを持っております。なお夫々一様ではなくとも何らかの希望、抱負、それに決意というような、誠にはかりしれない内容を含む言葉であると思われる。なお私のすきな言葉の中に、功在不舎、という荀子の言葉がありますが、今年も縁の下の力もち、というこんな言葉にあまえて、じっくりと一歩一歩確実な足跡を残していきたいと思っております。

新年を迎えて

新潟県農林部治山課長　阿部正博

新玉の春を迎えて御祝詞をまず申しあげます。

昭和49年は、かつてないほどの経済動乱に明けくれ、心の安まる暇もない日々でありましたが、雪深い新潟での静かな新年は、俗事を忘れさす思いであります。

雪は白魔という「おそろしい」別名もあるほどその計り知れぬエネルギーで、人間を恐怖に陥しいれる反面、夜半、窓辺の小笹に舞い落ちる風情や、浅春の陽だまりに積ることなく降り、瞬時に消え果てる淡雪の姿は、雪国に住む人の詩情を掻き立てるよすがでもありましょう。

新年からの数カ月は、静寂の雪景色のもとで、黙考する絶好の機会とも思っております。

林業の世界に身を寄せるわたくしとしては、その振興を心から願う者の一人ではありますが、巨大な経済メカニズムの中で、山林に働き、苗を植え、育て、収穫し、各種の産物を供給するといういわば土地産業を主軸とする林業は、経済変革の波頭をモロにかぶる本質的弱さと、立木という蓄財を野天にさらしばなしにするがための災害に対する不断の懸念がいつもつきまとうことに、何等かの改善策が、挙国的に実施さるべきと信じています。

しかも、その対策が生産業のデメリット部分に対する税制度の優遇や、災害リスクに対しての保険などの面よりは林業の生産期間を短縮するという正面攻撃を強化したいと考えます。

この意味で、現在進行中の林木育種事業は、その先兵であり、林業史上の大きな足跡となるものでしょう。精英樹選抜からスタートしたこの事業は、採穂園、採種園造成、クローン養成、次代検定林設定、実用化と一歩一歩と運びつつありますが、いまここに、ふりかえってみると、その航路は、試行錯誤に満ちたものでありました。

例えば、発根率、仕立形式、とくに雪害除去の問題などは、その最たるものですが、少しづつ改善してまいりました。

現有48*ha*の採種穂園の経常的管理費の捻出や県営養成を民営に移行するタイミングの問題やそれにもまして、東北地帯において、挿木養成が苗木生産業としてペイするか、民間造林が素直に挿木苗を使用するかが、重大な課題であります。

林木育種事業開始以来、すでに20有余年の歳月をおくりましたが、再び抵抗性品種の開発が進められつつあり、数10年という長いサイクルで、その事業効果を確かめようとしています。

この重要な事業に参画できる機会を利用して、先輩の敷いたレールを忠実に承継し、次代に送りこむことが第一義でしょう。しかし、育種事業のような、新しい領域の仕事は、未踏の分野でありそれなりに決断を要する場面が少なくありません。

精英樹選抜に錯誤がなかったか、精英樹クローンがその優秀な遺伝子を果して発現せしめるか否か、考えればキリがない。それだけに、民間に植えこまれた精英樹(正しくは候補木というべきか)の成長が気にかかる昨今であります。

しかし、この事業は、必ず通らねばならない道であり、これに多少でも参加できる喜びもまた、大きいものがあります。育種が抵抗性品種創成や広葉樹方面に新しい眼を向けようとしていることは、タイムリーと考えます。地球上の木材資源対策や環境対策に林木育種事業が、大きく貢献するばかりでなく、直接的には、わたくしたちの県行政に連なる林家の方々が、育種苗を植えてよかったと喜ぶ日の来ることを確信しているわけであります。

昭和50年1月1日発行
編集　東北林木育種場
岩手県岩手郡滝沢村滝沢
TEL 019688(滝沢駅前局)4517
印刷所　杜陵印刷